

# 英語教員志望学生のための資質診断書開発： 質的分析から見えてくる資質

渡 辺 敦 子 (文教大学文学部)

秋 山 朝 康 (文教大学文学部)

大 場 博 幸 (日本大学文理学部)

Development of Credentials Diagnosis for Students Aiming to be English Teachers:  
Credentials Disclosed by Qualitative Analysis

WATANABE ATSUKO, AKIYAMA TOMOYASU  
OHBA HIROYUKI

(Faculty of Literature, Bunkyo University)

(Faculty of Literature, Bunkyo University)

(College of Humanities and Science, Nihon University)

## 要 旨

本稿は将来英語教師を目指す学生を対象とした英語教師の資質を診断する問診票開発を目的とした研究の経過報告である。教職履修の学生は大学在籍中に何をすべきかを調べるため、同大学卒業生の現職教師6名に半構造化インタビューを行った。分析後、彼らは在学中になりたい教師像を描いていたという英語教師の資質の核 (core value) を持っていた事、またサークル等の人間関係を大切にしていた事が明らかになった。

## 1. 研究の目的と方法

英語教師に必要な資質はいつどこで身に付くのか。英語教師には、英語力とともに教師一般に必要な教える能力とスキルも必要となる。日本で育った日本語ネイティブであれば、英語教師に求められる英語力を身に付けるため、10代から20代の時期に継続的に英語学習を続ける必要があることは間違いないだろう。ならば、そうした学習を続けることを可能にする意欲はどこからくるものなのだろうか。また、教師としての能力とスキルは、大学の教員養成課程における訓練とOJT (On the Job Training) によって徐々に体得されると考えられる。しかし、教員養成課程の選択という形ですでに適性の無い者はスクリーニングされているという可能性もある。ならば、

教師の能力やスキルというのは、大学以前の段階で培われるもので、大学における訓練だけで育成できるものではないのかもしれない。そう考えると、英語教師に必要な資質は三つのルーツを持っていると推測できる。遺伝的な性格傾向や能力など生得的なもの、大学入学以前に形成された人格や経験的に培われた能力、大学入学以降のそれら、である。

この研究では、大学入学以降の段階で身に付けることのできる能力やスキルが何かを明らかにすることを試みる。それらに焦点を当てることで、大学における英語教師養成プログラムを効果的に組織し、また適性者をスクリーニングできるようになるはずである。あるいはそこまで辿りつけなくても、その手前の段階となる、英語教師のための問診票を作

成することによっても、今、目の前に存在する英語教師志望者たちをサポートすることができるだろう。

大学入学以降に培われる英語教師に必要な資質に迫るために、本研究では質的アプローチを採用する。方法としては、A大学出身の英語教員6人にインタビューし、大学およびその前後の経験について尋ねた。6人の英語教員の全員がA大学の英文科出身である。A大学は南関東に複数のキャンパスを持つが、埼玉県内にあるキャンパスには教職志望の学生が多く集まる。その文学部に設置されている英文科においては、中学校および高校の英語教員免許の取得を目的とした学生が多く在籍している。

なお、この研究は調査に数年を要する長期プロジェクトである。インタビューだけでなく、教職志望者学生のデータを用いた量的な検証を行うことも計画している。混合研究である。データを収集するためには大学時代の経験を事細かに尋ねるアンケートが必要であり、今後の実施を計画している。加えて、質的データ収集のためのインタビューにおいては、学生時代に教師を目指していたが結局進路を変えた者も対象とする必要があるだろう。したがって、本研究は、研究の第一段階であるパイロット・インタビューの結果の報告となる。本研究の全体像は図1を参照されたい。

## 2. 先行研究

教職志望者の減少傾向は社会全体で深刻な問題と捉えられている。教師に必要な資質能力として授業を効果的に行うスキルのみならずその資質の涵養の必要性が述べられてきたが（紺野、丹藤、2006）、大量退職、大量採用、教育課程再課程認定、新学習指導要領施行、ICT、特別支援教育などへの対応で著しく変化する教育現場において、その重要性は喫緊の課題となっている。

文科省が設置した教育職員養成審議会（1999）は、教員に求められる資質能力として1. いつの時代にも求められる資質能力、2. 今後特に求められる資質能力、3. 得意分野を持つ個性豊かな教員の必要性の三点を挙げた。1は教師としての使命感、人間の成長・発達に関する深い理解、学習者に対する教育的愛情、教科に関する専門的知識、広く豊かな教養、またこれらを基盤とした実践的指導力と記載されている。2は地球的視野に立って行動するための資質能力、変化の時代を生きる社会人に求められる資質能力、教員の職務から必然的に求められる資質能力と提示され、それぞれの資質の元に様々な能力が明記されている。そして3については各教師の得意分野づくりや個性の伸長を図ることと述べられている。

また様々な教育機関、研究者により教師の

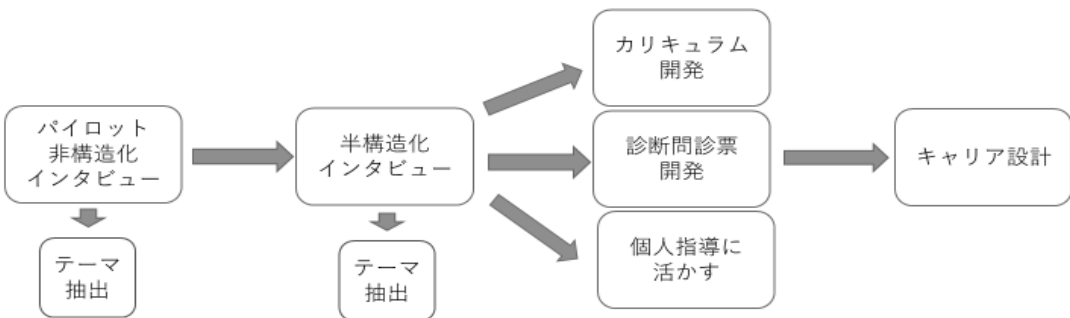


図1. 本研究の概略図

資質能力の明文化がされている。本研究がなされたA大学においては、教師の資質能力を次のように定義している。1. 使命感、責任感、教育的愛情、2. 社会性、対人関係能力、3. 児童生徒理解、学級経営等、4. 教科内容等の指導力を持ち備えていること。同大学の教員免許取得志望者は毎年ポートフォリオを通してこれらの資質能力を振り返る機会が与えられている。

教師の資質能力に関する多くの研究も行われているが、その特徴的な点として次の二点が挙げられる。まず一点目は資質能力研究の多くが現職教員を対象にしており教職課程に在籍する学生に関しての研究例が少ないことである（Nagamine, 2008; Yoshimoto-Asaoka, 2015）。益々多様化する教育現場に対応する教師の資質能力の育成は就職後からではなく、教職課程履修時から始まるべきだという考えが一般的になっている。教職課程在籍時の学生を対象とした研究の必要性は顕著である。

二点目は既存の枠組み（フレームワーク）を使用している研究が多いことである。教職課程に在籍している学生を対象にした研究も現存するが、その多くが既存の枠組みを通しての研究になり、その中の項目間の相関関係等を分析し、枠組み自体の研究となっているようだ。教師の資質能力について述べている研究がよく見られるが、大学在学時に彼らは何をしてそのような資質能力を身に付けることができるのかを探究している研究はほとんど見られない。

既存の枠組みを使用することにはいくつかの問題点が挙げられる。まずは時間軸の問題である。文科省が資質能力として、不易と今後特に求められる資質能力を挙げているように、今後の教育現場に対応できる教員を育むためにはその時代、状況により必要とされる資質能力を身に付けることが必要になるだろう。そして枠組みも常に変化していくことが望ま

しい。さらに枠組みが使用される社会的文化的文脈の問題がある。海外で使用されている枠組みを日本という文脈に変えた枠組みも存在するが、多様化する教育現場において、その教育現場が位置付けられる文脈に即した項目を有した枠組みが必要となるのは明白であろう。

本研究は教師となるための問診表作成のために、教師の資質に関する既存の枠組みを使用せず、現職教師が大学時についての語りの中から資質を見出すというグラウンデッド・セオリー・アプローチの手法を取る。三上（2017）が指摘しているように質的データ収集・分析からは既存の枠組み内の項目等からは見られないことが浮かび上がると考える。

### 3. インタビュー調査

まずはパイロット的なインタビュー調査を行った。このインタビューは2017年10月から2018年2月の間にA大学を卒業した現職英語教師6名を対象に約45分間行われた。インタビューの目的は参加者に英語の教師となることに関連した大学入学前、入学後の体験を自由に述べてもらい、今後の半構造化インタビューのための項目を選定するためであった。そこでインタビューは非構造化形式で行われた。インタビューを行ったのは秋山、渡辺であり、非構造化形式のために事前に質問項目は用意しなかったが「教員採用試験合格において役に立った事」「教壇に立った今何が役に立った事」等についての質問をすることとしていた。データ分析のために参加者の同意を得てインタビューは録音された。データ分析はインタビューの録音をインタビューを行った研究者が何回も聞き、繰り返し出てくるトピック、テーマなどをコーディングした。そして、研究者間でコーディングしたデータを持ち寄り、そこから共通テーマとして浮かび上がったことをまとめた。

その内容をまとめたものが表1-Aと表1

- Bである。表1 - Aと表1 - Bの違いは誰がインタビューしたかの違いであり、表1 - Aは秋山が担当し、表1 - Bは渡辺が担当した。

表1 - Aの3人の教員は教員経験4年以内の比較的若い埼玉県の公立の中学校英語教員である。表には教師の資質やそれに関わりがありそうなところに下線をひいた。例えばS先生は英語教師になるというよりもサッカーを教えることに興味を持ち始め、プロになることをあきらめて初めて教師になってサッカーを教師という職業を意識したという。一方、M先生のきっかけは小学校の時にいじめにあ

って自分を助けてくれた教師に憧れを持ち自分もそんな生徒に寄り添う教師になりたいと強く思ったのがきっかけであった。その気持ちはずっとM先生の信念となり、教師になってからも「常に生徒のことを考える教師になりたい」と述べてくれた。そして自由に自分で表現できる英語に魅せられ英語の教師になったという。N先生は高校のときの恩師の英語の授業がとても面白くそのことが決定付けたと述べた。3人とも教師になるきっかけは違うものの憧れの教師、自分がなりたい教師像をはっきりと持っているということが共通している。

表1 - A インタビュー結果サマリー

協力者	S先生 (男) (中学教員)	M先生 (女) (中学教員)	N先生 (男) (中学教員)
教師になるきっかけ	教師は中2年の11月頃の3者面談がきっかけでサッカー教えたくて。	小学の時いじめにあってまして、担任の先生が私をケアしてくれて、「学校に一人でもいることは素敵だなー」と思いました。	中学の時は英語が楽しいなーと思った。
英語教師になるきっかけ	高校の担任がバスケット部でA大卒だったのですが（英語の先生で）。	高校のときに豪州へ修学旅行へ行って大変よかったです。英語を使う世界は広い誰とでも話せるという世界に憧れていて。	高校の時の担任で英語の教師の方が非常に良くて、英語を使つての職業はなれたらいいかなー。
大学生生活	教員採用合宿で他の人と関わって刺激受けました。4年間バイトはスターバックス。		自分の周りは、教員になりたいという学生と免許だけという学生もいました。学年が進むにつれて目指す友人と一緒にすることが多くなりました。
教員採用試験	難関大レベルの赤本なんか買って英語も3月頃から勉強しました。	三年の秋頃から勉強をはじめました。問題集とか過去問とかやってみました。カフェとかでやってみました。	
教師になるために大切なこと	コツコツ型だと思います。部活とか毎日やっていた影響ですかね。続けることは自分は好きなんです。自分のために続けることは好きです。	もっとも大事なことは「子供のことを一番最初に考えること（生徒を思う）ができるか」。生徒への情熱だと思います。	教員になったらこんなことをしたいとか、こんな風に教えてみたいとかははっきりとしたイメージを持つことは大事だと思います。

注) S先生（非常勤2年経験）、M先生（非常勤2年経験）、N先生（非常勤4年経験）

表1-Bでも表1-Aと同じようなことがあてはまる。特にA先生とU先生には憧れの教師が親であったことである。前述のN先生と同じように、A先生は高校の英語の先生に影響を受け、U先生は洋楽好きな叔父からすすめられて英語が好きになり、英語教員になろうと思ったと、述べている。

もう一つ共通していることは3人とも学生時代、忙しいながら充実した学生生活を送ったことと一緒に勉強する仲間の存在が良かったと、述べていることである。3人とも塾講師をしていたようで特にI先生の場合は様々な人と知り合えたことがその後の教員生活にプラスに寄与したと述べている。また3人の先生方はゼミのことを述べているがそのことが教員の資質に影響があるかどうかはここでは不明である。一方、表1-Aの3人はゼミについてはあまり触れていないのでこれからの課題としたい。

た、述べていることである。3人とも塾講師をしていたようで特にI先生の場合は様々な人と知り合えたことがその後の教員生活にプラスに寄与したと述べている。また3人の先生方はゼミのことを述べているがそのことが教員の資質に影響があるかどうかはここでは不明である。一方、表1-Aの3人はゼミについてはあまり触れていないのでこれからの課題としたい。

表1-B インタビュー結果サマリー

協力者	I先生(男) (中学教員)	A先生(男) (高校英語)	U先生 (中学教員)
教師になるきっかけ	<u>中学校の時の英語の先生に憧れを抱いたため。</u>	<u>両親が教員である意味いちばん近くにその仕事があったこと。</u>	<u>教員一家。父が体育の教員。</u>
英語教師になるきっかけ		<u>高校教師に決めた理由は高校3年生の時の英語担当の先生の影響です。</u>	小学生の頃、叔父に洋楽をすすめられて、洗脳のように紹介してもらって英語が好きになった。英語が身近。
大学生生活	<u>バスケ サークル。。。一番やってよかったのは同僚、仲間、別の年代の幅広い年齢層 社会勉強、人生経験 縦の関係(年代が広い)が役にたった。</u>	不規則中の不規則 3年生時は夜寝て朝起きて学校行ってバイト、ゼミでやっていたことがあまりにもきつかった。	個別授業の塾講師のバイト。高校卒業直後3月から教えそれから4年間教えた。またクラブはバスケット一本。
教員採用試験	色々な経験を積んだほうがよい。	ゼミでの忍耐が1番。スキルとかテクニックではないので。	
教師になるために大切なこと	採用試験の面接、人と人とのつながり。出会いや何事にも謙虚に前向きに取り組む姿勢が大切であり、常に学び続けることが教師の使命。	難しいことは考えずに、率直に言うのであれば、自身の教科の専門性の高さ、それをどうやって教えていくかを考える力。	<u>無意識のうちに父から色々な学校のこととか聞いていた。</u>



6人のインタビューデータを分析したところ教員の資質はこれであると断言できそうな項目があったわけではない。その原因は6人というサンプル数の少なさ、そして教員の資質という曖昧で複雑なことを調べているのでこの段階ではっきりと指摘はできない。

ただ6人に共通していることは少なくとも3つは存在するかもしれない。一つは（英語）教師になるとても強い信念があること。二つ目はどんな教師になりたいのかイメージができていないこと。教師になりたいといった志望動機にプラスして具体的なイメージ、どんな教師になるかはっきりとしたイメージがあることが重要なことかもしれない。三つ目は人間関係を築くことの大切さを意識していることである。バイトや採用試験の勉強をする際に信頼できる仲間との関係を築くことができる、または築くことが大切であるという意識をもっていることが教師の資質には重要であると言えるかもしれない。

#### 4. インタビュー結果に関する考察

パイロット・インタビューから浮かび上がってきた上記三点についてここで述べたい。これら三点から教師になりたいと思った切っ掛け、教職志望感の継続、さらに教員採用試験合格において他者の存在が大きいことを示唆している。

##### ● 教師になろうという強い信念

インタビューを受けた全ての教員が大学入学前に教職に就くことを意識していたようだが、英語の教員志望のきっかけとなったのは「英語という教科が好き」、「英語が好き」なことよりも「教えたい」または「英語教員に憧れて」ということから「英語」より「教える」ことに焦点があったようだ。コーチとして特定のスポーツを教えたかった、他の教科を教えたかったといった教師もいたが、英語が身近だったことから英語を教えることを選んだという。また英語の教師に憧れて教員

を目指したという教師の場合も「英語が好き」よりも「英語を教える教員が好き」という教員になりたいことへの比重が強いようだ。「洋楽が好きで英語が好きになった」という教師もいるがこの個人の場合も自分の親が教師（英語教師ではない）ということから「教える」ことを自分が将来就く職業として意識していたと言えるだろう。

また大学在学中に教職志望度を維持することも重要であろう。A大学の英文科では入学時には7～8割の学生が教師志望であるが実際に教職に就く学生は3～4割だ。インタビューを受けた教員は教師になりたいという気持ちで大学入学後に、大学教師、塾の講師、教職を目指す友人、教職についている家族などの他者と触れ合うなかでさらに強固になったという。ここでも他者の存在がひとつの重要な鍵であることが見て取れる。

##### ● どんな教師になりたいかイメージができていないこと

また共通している要素としてなんとなく、ぼんやりと教師になりたいと思うのではなく自分がなりたい教師のイメージが具体的かつ肯定的であることが挙げられた。教職イメージが具体的な学生のほうが授業の取組について積極的であることが言われており（伊田、2003）、教職課程に在籍している学生に教職イメージを作り上げることが重要だと言われている（深津、2012）。教職イメージと言っても、教師を目指している学生にとっての多様な教職イメージがあり、必ずしも全てが肯定的なイメージばかりではないことが指摘されている（三島、2007）。インタビューに答えた現職教員の全てが、憧れの教師の存在、または家族が教師と身近にモデルとなる教師が存在していた。そこで教師に対して具体的に肯定的なイメージを描くことができ、これが教職を目指すひとつの大きな契機になった可能性が挙げられる。

● 人間関係を築くことの大切さを意識

インタビュー参加者が学生時代に行ったことで教員になるにおいて役にたったこととして、ある特定の授業を履修したということよりは4年間通して続けたアルバイト、4年間参加したサークル活動、教員採用試験に向けた学生間で任意に形成された長期的な勉強会など、ひとつの事を長期間、他者と関わりながらやっていくことが挙げられた。そしてインタビューを受けた複数の教師が同じアルバイトをして、同じサークルに所属しながら教員試験の勉強を行っていたようだ。ここから共通していることとして、困難、苦難を他者との協力、励まし合いの中で辛抱しながら最後までやり遂げたということが見えてくる。

彼らは長期にわたる人とのやりとり、付き合いを自分の成長における重要な要素として見なしているようだった。特に今まで自分が苦手だったこと、例えば、異性と話すこと、人前で話すこと等を学び、克服することを可能とした場として捉えているようだった。さらに、性別、年齢、考え方が様々な多様な他者と同じ場に所属することにより、多様な個人と接し、そこから学んでいく場としても認識されていたようである。教職課程における学習、成長における他者の存在の重要性は中原(2013)等により述べられている。ここで重要なのはインタビューを受けた教師が他者の存在、他者と人間関係を築くことの重要性を意識、そして認識していたことだろう。

## 5. 結論とこれからの研究課題

本研究はまだ始まったばかりである。早急に結論を出すことは控えるべきだが、今回の研究で少なくとも教員の資質への手掛かりとなる知見を得ることができた。それはインタビューによって明らかになった2つの共通事項である。

1) 教師になりたい強い志望動機をもっていて自分になりたい教師像をすでに持

っている (core value の存在)。

2) 学生時代にアルバイト、サークル、勉強仲間など人との関係を大切に思っている。

ここでcore valueについて言及する。それは教育の信念や価値と似ていて、教員の核となるものであろう。教員になることに強い意志をもっておりかつ具体的な理想の教師像で成り立っているものかもしれない。そして核がしっかりしていればどんなことがあっても揺るがないものとも言えるであろう。例えば、M先生は非常勤を4年やっても教師になることはあきらめなかった。大学時代友人が教職をあきらめても、自分はいきりあきらめなかった。このように決して揺るぎない核になる、つらいときには自身を支えるような存在であるといえる。しかしながらここで仮にcore valueと呼んでいるものは手探りの段階であり、解明するには至っていない。さらに上記2つの要因がどのように関係しているかについてはまったく触れることができなかった。恐らく資質は2つでなくもっと多く存在し、その要因は複雑に絡みあっていると考えるのが自然であろう。

最後にこれからの研究課題を以下に述べて終わりにする。

- ・各core valuesに基づく半構造化インタビューの実施とサンプル数の増加。
- ・教員をあきらめた学生へのインタビュー。
- ・教員になった学生はどのような認知的ストラテジーを使用しているのか。
- ・診断問診票の枠組みの作成への試案作り。

一つ目は研究協力者をさらに増やしcore valueのようなものが存在するのか、どのような特性があるのかをさらに調査する必要性である。そして次にcore valueに基づき、診断問診票の枠組みを作成することも必要である。さらに、教師をあきらめた学生へのインタビューでは、なぜ教員の道を断念したのか

を調査することにより教員になった先生と対比することによって有力な情報を得られると考える。最後に、筆者らの投稿時点の所属学科は英文科であるので（理想的には）英語教師に見られる資質のようなものを調査したいと考える。英語教師に特有な認知ストラテジーの存在などを調べることによってさらなる研究課題が見つかるのではないかと考える。我々の研究はまだまだ始まったばかりである。

### 参考文献

- Nagamine, T. (2008). *Exploring preservice teachers' beliefs*. Germany: VDM Verlag Dr. Muller.
- Yoshimoto-Asaoka, C. (2015) *Mitigating the disparity between theory and practice: EFL student teachers' perspectives and experiences of their professional development*. Doctoral dissertation, University College London/Institute of Education.
- 伊田勝憲「教員養成課程学生における自律的な学習動機づけ像の検討：自我同一性、達成動機、職業レディネスと課題価値評定との関連から」『教育心理学研究』51(4), (2003), pp. 367-377.
- 紺野 祐、丹藤 進「教師の資質能力に関する調査研究—『教師レジリエンス』の視点から」『秋田県立大学総合科学研究彙報』7, (2006), pp. 73-83.
- 中原 淳「経験学習の理論的系譜と研究動向」『日本労働研究雑誌』639, (2013), pp. 4-14.
- 深津達也「「協同学習」による学びの姿勢の変容：自主的に学ぶ学生の育成を目指した実践研究」『びわこ成蹊スポーツ大学』9, (2012), pp. 59-72.
- 三上明洋「アクション・リサーチを通じた英語教師の専門性向上と成長に関する量的・質的研究」『科学研究費助成事業研究成果報告書』(2017)
- 三島和剛「教育実習生の実習前後の授業・教師・子どもイメージの変容」『日本教育工学会論文誌』31(1), (2007), pp.107-114.
- 文部科学省・教育職員養成審議会「養成と採用・研修との連携の円滑化について（第3次答申）」(1999)
- [http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/old\\_chukyo/old\\_shokuin\\_index/toushin/attach/1315393.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/old_chukyo/old_shokuin_index/toushin/attach/1315393.htm) (2018年4月3日アクセス)